



## 国語，数学Ⅲ 問題

はじめに，これを読みなさい。

1. 解答用紙には，あなたの受験番号が印刷されています。受験番号が正しいかどうか，受験票と照合して確認し，氏名を記入しなさい。
2. 「国語」の問題は裏面から始まります。
3. この問題冊子は，「数学Ⅲ」については表面から 10 ページ，「国語」については裏面から 20 ページあります(表紙の次の白紙 2 ページはメモ用紙として使用してかまいません)。必要な科目を選択して解答しなさい。
4. 解答用紙の「解答科目マーク欄」にマークし，「解答科目名記入欄」に解答する科目名を記入しなさい。マークされていない場合，又は複数の科目にマークされている場合は，この時限の科目は採点対象外となります。
5. 解答は，すべて解答用紙の解答欄にマークしなさい。
6. 1つの解答欄に 2つ以上マークしてはいけません。
7. 解答は，必ず鉛筆又はシャープペンシル(いずれも HB・黒)で記入しなさい。
8. 訂正する場合は，消しゴムできれいに消し，消しくずを残さないようにしなさい。
9. 解答用紙は，絶対に汚したり折り曲げたりしてはいけません。
10. 解答用紙は持ち帰らないで，必ず提出しなさい。
11. この問題冊子は必ず持ち帰りなさい。
12. 試験時間は 60 分です。
13. (数学Ⅲ) 分数形で解答する場合は，既約分数で答えなさい。
14. (数学Ⅲ) 根号を含む形で解答する場合は，根号の中に現れる自然数が最小となる形で答えなさい。
15. マーク記入例

良い例	悪い例
	

国語問題

(解答番号 1～29)

はじめに裏返して、表紙の注意事項を必ず読みなさい。

1. 「国語」の問題は20ページあります。
2. 「数学Ⅲ」の問題は反対の面にあります。

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「最近われわれは分業という文明の偉大なる発明について大いに研究し、大いにそれを究めてきた。ただし、この命名はまちがっている。じつは分割されているのは労働ではない。人間である。人間が分割されて、たんなる人間の断片にされてしまっている」と言ったのはジョン・ラスキンである(『ゴシックの本質』)。一八五三年に書かれた文章である。ロンドン万博でヘンリー・ロバーツがアルバート館をつくったその二年後である。ミユルーズの労働者都市の第一期工事が始まった頃である。

ラスキンはこの頃、イギリスでもっとも影響力のある批評家だった。ゴシック建築をつくった労働者や職人がいかに生き生きしていたか、ゴシック建築がいかに自由な様式なのか、ラスキンはそれを強調する。ギリシア建築やローマ建築に比較して、当時、ゴシックの建築様式は野蛮な様式だと思われていたのである。ゴシックはゴート族の様式を意味していた。蔑称だった。そのゴシックの建築様式を高く評価してその装飾には思考の自由があると言ったのである。

「そこに見られるむかしの彫刻師の途方もない無知をあなたはたびたびあざ笑ってきた。あの醜い子鬼(ゴブリン)や不恰好な怪物、解剖学を無視したぎこちない姿のいかめしい彫像をいま一度吟味していただきたい。だがそれらをあざ笑ってはならぬ。なぜなら、それらは石を刻んだ職人ひとりひとりの生命と自由のしるしなのだから。それは思考の自由と人間という存在の位の高さをしめすものである。

その不恰好な彫像はその石を刻む職人が、今もそこに生きている証である。ところが分業化されて「分割された人間」は機械でしかない。「機械へと墮落した人間はそこに生きている証を持たない。機械は労働の喜びを持たない。ラスキンはゴシック建築、そしてそれをつくった人びとを高く評価する一方で、「労働」から喜びが失われたそのような産業化社会を厳しく批判したのである。産業化社会とは「人びとがパンを得るために仕事に喜びがまったくないということであり、それゆえに喜びの唯一の手段として富を求めている」というような社会である。労働する喜びではなくてそこから得られる

X

が価値になった。ラスキンは労働がただ

X

に結びつくようなそうした産業化社会ではなくて、労働すること

X

が目的になった。

そのものが目的であり喜びであるような世界をつくらなくてはならないという。

ところがこのラスキンと同時代のマルクス(ラスキンよりも一歳年上)の考え方は違っていた。労働は喜びではない。労働は労働者階級から解放されるべきものだったのである。マルクスは「労働者階級を解放することではなく、むしろ、人間を労働から解放することを課題にしている」とアレントは言う(『人間の条件』)。マルクスにとつては労働が廃止されるときに「自由の王国」が始まるのである。「共産主義革命は……労働を廃止する」(同書)ことを目指したのである。マルクスにとつて、労働は喜びどころか苦役以外の何ものでもなかった。実際、この時代「労働は、貧困の避けられない当然の結果」であると考えられていたのである。労働は生きるための強制労働だった。「労働が罰」だったのである。それが苦役だからである。でも、その苦役は分業によつてもたらされるものではない。ラスキンの言うように、分業が労働者を機械へと墮落させるのではない。分業は否定されたり肯定されたりするようなものではなくて、むしろ、それは人間の社会的発展のための基本的な条件だとマルクスは考えたのである。「さまざまな国民相互の関係は、こうした諸国民のそれぞれが、その生産諸力や分業や内部的な交通をどのていどまで発展させているかにかかっている」(マルクス&エンゲルス『新訳ドイツ・イデオロギー』)。分業は社会と共にさまざまな分業の形態に発展するものなのである。「ある国民の生産諸力がどのていどまで発展しているかは、分業の発展の度合いにもっともはつきりと示される」とマルクスは言う。「まず工業労働と商業労働の農耕労働からの分離」、そして「これらのさまざまな部門内部での分業」にいたるまで分業は様々なかたちに進化する。労働者の分業は産業化社会の生産性の躍進にとつては必要な条件なのである。

産業革命があつたればこそ人間の労働の生産力が向上して、——ここに人類にあつて以来はじめて——すべての人々の内に完全な分業を行い、ただに社会の全員の十分な消費を満たした上、なお豊富なる準備金をも供給し、その上になお、各人には十分なる閑暇を与え、それによつて歴史的に伝承した文化——科学、芸術、社交形式等——の内ではほんとうの価値あるものはこれを保存せしめ、いなそれに止まらず、それ等を支配階級の独占から解放して全社会の共有物とし、その上でそれを育てる

というような可能性が与えられることになったのである。(エンゲルス『住宅問題』)

ラスキンが分業を産業化社会に特有の「非人間的」なものだと考えたのに対して、マルクスそしてエンゲルスはそれを歴史的進歩の過程だと考えたのである。労働者の解放のためには生産性の向上は必須の条件だった。そして分業こそがその向上を担う核心部分だったのである。

だから労働者はその労苦から解放されるべきであったとしても分業は必須であった。この時代の多くの人たちと同様、マルクスもまた「かつてみたこともないほど高い西洋人の現実的な生産性にいわば圧倒された」からだと言う(『人間の条件』)。その高い生産性は労働者の「労働力」<sup>3</sup>に起因している。一人の労働者の有する「労働力」はその労働者自身の生命を維持する以上の能力を持っている。「労働それ自体ではなく、人間の『労働力』の剰余が、労働の生産性を説明する」のである。その労働力の剰余は「一定の方向に結集すれば、何人かの労働だけで万人の生命を十分に支えることができる」。労働を分業して、さらにそれを「一定の方向に結集する」(協業)、それが生産性を上げる最も有効な方法なのである。マルクスは分業と協業とを一連のプロセスだと考えたのである。労働の協業のためにはまずその前に分業されなくてはならない。

労働力の剰余を適切に配分することによって、つまり労働力の Y を禁ずることによって「何人かの労働だけで万人の生命を十分に支えることができる」、それでも依然として労働は労苦である。だから、一日にほんのわずかな時間だけ働く。そして残りの自由な時間を「今日ならさしずめ『趣味』<sup>4</sup>とでもいうべき厳密に私的で、本質的に無世界的な活動力に費やすだろうと予見した」(『人間の条件』)。さらに、そのほんのわずかな労働も趣味のような労働に変えることができると考えたのである。これこそ労働からの解放である。すべての社会的活動が趣味となるような「自由の王国」が実現すると考えられたのである。「無世界的な活動力」という意味は、その活動の結果は後に何も残さない、活動が終わったらそのまま消費されるという意味である。世界の中に何一つ残さない。趣味<sup>4</sup>という活動はただちに消費される。「共産主義社会あるいは社会主義社会では、すべての職業がいわば趣味となる。画家がいるのではなく、もっぱら絵を描くことに時間を費やす人がいるだけである。つまり、『今日はこ

れをし、明日はあれをし、朝は狩りをし、午後には魚釣りをし、夕べには家畜を育て、夕食後には批判をする。彼らはそれぞれ自分の好きなことをするが、そうだからと言って狩猟家、漁夫、羊飼、批評家になるのではない』、『新訳ドイツ・イデオロギー』。狩猟家、漁夫、羊飼、批評家という分業を専門にするわけではない。さまざまな分業を日々自由に行う。今日はこれをし、明日はあれをする。それだけを専門にしてはならない。それこそ労苦の原因だからである。「同じ仕事を連続してやり続けると、生き生きとしたやる気と緊張が消えてしまう。それらは、活動内容を変えることによって、元気を取りもどし、また息を吹き返すものである」とマルクスは考えた。専門化しない。だから「趣味」なのである。労働者が労働から解放されるということは、全ての人がそのような趣味に生きる社会を実現することなのである。

「人間を（労働する動物）と定義づけておきながら、次いで、労働というマルクスによれば最も人間的で最大の力をもはや必要としない社会に、ほかならぬ（労働する動物）である人間を導いているということである」『人間の条件』。『Z』である。「このようにはなほだしい根本的な矛盾は、むしろ二流の作家の場合にはほとんど起こらないものである」とアレントは言うが、でも、労働を趣味に変えるというマルクスの野望（というよりもマルクスにとっては必然）はそれ自体として矛盾ではない。単にフリーエと同じユートピアにマルクスもまた住んでいるということの意味しているだけである。

この矛盾はマルクスではなくて、むしろ私たち自身の矛盾なのである。マルクスの「労働力の剰余」という考え方を丸ごと信じ込んだ私たち近代人の矛盾である。私たちは、今、（私たち）労働者にとって労働時間は短ければ短いほどいいと考えている。時間給は高ければ高いほどいい。マルクスと同じように労働は労苦だと考えているからである。でも、ラスキンの言う労働は生の証であった。私たちがまた労働を労苦であると同時に、ときに生の証であると思っている。「仕事が生きがいだ」というのは、やはり私たち（労働者）の一方の実感である。

（山本理顕『権力の空間／空間の権力』による）

注

- \*ジョン・ラスキン……一八一九—一九〇〇。評論家・美術評論家。『ゴシックの本質』の著者
- \*ヘンリー・ロバート……一八〇三—一八七六。イギリスの建築家
- \*アルバート館……ヘンリー・ロバートが労働者階級のために設計した住宅
- \*ミュルーズ……フランスの都市
- \*ゴシック建築……一二世紀後半から一五世紀にかけて北西ヨーロッパに現れた建築様式
- \*ゴート族……ドイツ平原の古民族
- \*マルクス……カール・マルクス(一八一八—一八八三)。プロイセン王国出身でイギリスを中心に活躍した思想家・経済学者。ドイツ出身の思想家フリードリヒ・エンゲルス(一八二〇—一八九五)と共にマルクス主義思想を作り上げた
- \*アレント……ハンナ・アレント(一九〇六—一九七五)。ドイツ出身のユダヤ人でアメリカに亡命した哲学者。『人間の条件』の著者
- \*フリーエ……シャルル・フリーエ(一七七一—一八三七)。フランスの哲学者、社会思想家

問一 傍線1「思考の自由がある」とはどのようなことについてなのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **1**。

- A あえて解剖学を無視することによって生物の生命の限界へ挑戦しようとしたこと。
- B キリスト教では異端とされる小鬼や醜い怪物を信仰することができたということ。
- C 科学的な真理や皆が模範とする様式にとらわれずに生き物の姿を形作ったこと。
- D 世間から蔑まれていたにもかかわらず自分の芸術作品に自信を持っていたこと。

問二 傍線2「そこに生きている証を持たない」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **2**。

- A 人間という存在の価値を裏付けていた信仰心が失われてしまったということ。
- B 人間であるにもかかわらず自由を奪われて生きなければならなくなったこと。
- C 産業化社会の非人間的な労働条件によって人々の生活が困窮したということ。
- D 働きの個性が表れた成果を形として残すことがもとめられなくなったこと。

問三 空欄 **X** (三箇所ある)に当てはまる語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **3**。

- A 金 銭
- B 評 価
- C 名 誉
- D 安 定



問四 傍線3「労働力」の意味として、当てはまらないものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 4。

- A 人間から切り離せない力
- B 個性に基づく独創的な力
- C 社会において商品を生む力
- D 時間給として評価し得る力

問五 空欄 Y に当てはまる語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

5。

- A 転売
- B 搾取
- C 投入
- D 遍在

問六 傍線4「趣味という活動はただちに消費される」とはどのような意味か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 6。

- A 飽きてしまつて長続きしないということ。
- B 莫大なお金がかかつてしまうということ。
- C 成果が社会的に認知されないということ。
- D 個人の生きがいにはならないということ。

問七 空欄 Z に当てはまる語句として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

7。

- A 労働のない労働者の社会
- B 人間のいない趣味の世界
- C 労苦の消えたユートピア
- D 動物のいない人間の社会

問八 波線部「このラスキンと同時代のマルクス(ラスキンよりも一歳年上)の考え方は違っていた」とあるが、両者の考え方の違いの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 8。

- A ラスキンは労働とは人間らしさの証明であると考えていたが、マルクスは労働を消滅させることが人間の能力だと考えた。
- B ラスキンはゴシック様式の製作者の見返りを求めない仕事を評価し、マルクスは時間給で働く労働に価値があると考えた。
- C ラスキンは皆で力を合わせて働く協業に労働の価値を見出した一方で、マルクスは協業より分業の方に価値があると考えた。
- D ラスキンは世界の中に存在を示すことに人間の自由があると考え、マルクスは私的世界に生きることによって自由があると考えた。

(二) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

\* 曾野綾子氏の文章であつたと記憶するが、或る日、小説家にはよくある奇妙なフアンの電話を受け、自分は文学的教養(！)などとは無縁の日雇い労働者だと名乗り、それは男の話し振りからも演技ではなくて本当らしく、しばらく訳の分からないハン場かどこかでの自分の仕事の話をし、少しばかり小説も読んだこともあつて、あんたの電話番号をたまたま知つたので電話をしたのだと言う。そして、三島由紀夫はいいね、俺たちの気持ちを分かってくれと口にする。曾野氏は、私の記憶が正しければ、三島氏の世界の貴族趣味とこの電話の主の生活とがシヨウ<sup>②</sup>ウ<sup>①</sup>応するとは思えなかつたが……云々という感想を書きつけて文章を続けていた。この男が三島由紀夫のどの作品を読んだのか分からないが、この文章を読んだとき、この男の言うことは或る意味ではもつともなことだと感じたのを覚えている。

「三島由紀夫の貴族趣味」といった空虚なフレーズは三島由紀夫を語る時の常套句に属していて、それは三島氏自身にも原因はあるのだが、しかし、氏の作品を思い出してみると、戯曲作品には例えば『鹿鳴館』を代表として貴族的ないし華族的世界が多く描かれているが、小説作品には殆どいわゆる貴族的な世界が描かれることはないことが分かる。貴族の上流世界(?)の生活を舞台とした『盗賊』や『春の雪』は寧ろ例外で、『真夏の死』を象徴的な作品として『青の時代』『獣の戯れ』『金閣寺』『潮騒』等々、三島氏の小説の素材は貴族的ならざる「凡庸な者たち」の感性や彼らが巻き起こす「三面記事」的事件に共感的に集中しているのである。三島氏の作品の多くが「貧しい若者」「下層階級」に属する者たちを素材とした一種の復讐劇であることから、氏を左翼陣営に属する作家と思つた外国人審査員が氏を或る国際的な文学賞の候補者から外したという嘘か本当か分からない笑い話も存在するほどである。「素朴さの卑俗と野性」への憧れ自体すでに倒錯した貴族趣味の裏返しだと言つてしまえばそれまでだが、世界の直接的な凡庸さが三島氏にとって絶え間ない関心の領域であつたことは注視にあたいたいことだろう。

深い古層を持つ民話だと思つて調べてみると実は二、三年ほど前に起きた平凡な恋愛事件がその物語の原型だつたといつたことがよくあるとミルチャ・エリアーデが書いている。「物語」とはそれ自体としては凡庸でどこにでもある記憶される必要もない

日常的な事件を、或る意味形態をビルト・インされた数種の  
[ア] 的<sup>\*</sup>アーケタイプに配置する或る種の隠蔽形式であるとする  
れば、逆に言えば、「物語」の中核にあるものは春先の道路での蟻たちの轢死<sup>れき</sup>にも似た空虚で凡庸な事件であるだろうと予想する  
ことも出来る。とりわけ近代文学はバルザック以来、それ自体としては殆ど意味のない [イ] 的で凡庸な事件をかたづけし  
から強引に呑み込み [ウ] 化<sup>1</sup>しようとする試みであったと言える<sup>2</sup>とすれば、近代文学の中核にあるのは凡庸さの幻惑とで  
も呼べるものであると言うことも出来る。その反動として近代文学は逆に、とりわけ世紀末の周囲で、凡庸さからひたすら逃れ  
ようとする [エ] 化の系譜を生み出すことにもなるが、その中核にもなお反転された姿で、凡庸さ卑俗さが残留し続けるこ  
とになる。

日本浪漫派の薰<sup>③</sup>トウを受け、何よりも、実生活の経験を殆ど持たない少年時から文学活動を始めた三島氏は、ことの当然とし  
て特殊化された「純粹」の世界をその出发点に持つていた。幸い、貴族的ではないにしてもそれなりに「上流」の生活を保証した生  
活環境がその傾向を助長した。しかし、敗戦の経験と言うか、それ以上にその年に二十歳になったこと、つまりはいよいよ「生  
きねばならぬ」という誰にでもある平凡な切迫がそのひ弱なガラス状の枠を簡単に砕いてしまう。氏が終戦前後の自分を振り返  
った文章の大部分が、妹の死を語った部分を除けば寧ろ事態の平凡さを確認するようなシニカルな調子で書かれているのを思い  
出してみてもよいし、戦後<sup>2</sup>すぐに書かれた作品群が『煙草』や『春子』といった、少年が青年になるといふ平凡な物語であったこと  
を思い出してもよい。敗戦という劇的な事件が実のところとんでもなく平凡な日常的事象の連鎖でしかなかったこと、これが氏  
の出发点となる。戦争―敗戦を劇的「問題」とし、 [a] 描こうとしていた者たちの眼から三島氏の仕事がシニカルで空虚で  
美的に見えたとすればそれは、三島氏の反俗的な貴族趣味から来るものではなく、この徹底的な平凡さに対する幻惑から来たも  
のである。氏は戦争―敗戦をどのようなかたちであれ劇的に偽装する如何なるモメントも持たなかったのだ。三島氏のニヒリ  
ズムと呼ばれるものも何ら形而上学的なものではなくて、この譬えようもない平凡さ、「物語」が脱力してしまふような干からび  
切った平凡さの経験から来るものである。ニヒリズム研究と自称する初期の短篇『鍵のかかる部屋』、その拡大である『鏡子の家』  
を読めば、氏の言うニヒリズムが要するに [b] を意味したことが分かる。要するに三島氏が日本敗戦という事件において

負った傷は何ら劇的でも問題的でもない、事の目眩めまのするような平凡さという癒しがたい脱力めまだったのである。

そして三島氏<sup>3</sup>の戦後の試みはこの平凡さ—ニヒリズムからの美的な脱出の身振りであったと言うよりも、平凡さが自らを「物語化」しようとするメカニズムの探究であり実験であったと言ふことが出来るに違いない。例えば『真夏の死』を思い出せば、それは子供の水死という平凡な事件が母親の中で如何に自らを悲劇として生成して行くか、そのメカニズムをシニスムなしに描いたものであり、この手法は氏の大部分の作品の基調になる。後年の奇妙な作品『獣の戯れ』はその種明かしの作品と言つてもよいだろう。或る港町でのギリシア悲劇的な殺人事件を描いた後に末尾に唐突に「私」という素人民俗学愛好者が出て来て、間延びした「御船歌」についてのノートを披瀝した後にこの悲劇的な事件を巡る事の次第の平凡さを暴露する仕組みになっている。重要なのは、ここにおいて三島氏の視点が、悲劇的事件が蓋を開いてみればつまらぬ事件だったといった暴露的な下卑たシニスムにあるのではなく、「物語」というものが本質的に平凡な事件自身による自己劇化のメカニズムの産物であるということへの注視にあることである。氏はこのメカニズムに対して否定もせず肯定もせずに、それを描く。「物語」は、猫があくびをする様に、平凡な事件が自動的に自らの周囲に噴き出す自己劇化のメカニズムとして機能すること、従つてそれは事の次第の平凡さと切り離し難く結びついていること、これが重要なのである。

(丹生谷貴志『天皇と倒錯』による)

#### 注

\*曾野綾子……一九三一—。日本の作家

\*ミルチャ・エリアーデ……一九〇七—一九八六。ルーマニア生まれの宗教史学者・文学者

\*アーケタイプ……原形、雛形

\*バルザック……一七九九—一八五〇。フランスの作家

\*シニスム……社会の風潮・事象などを冷笑・無視する態度

問一 傍線①②③のカタカナの漢字と同じ漢字を含むものを、また④の読み方として正しいものを、それぞれの群から一つ選び、その符合をマークせよ。解答番号は①が 9、②が 10、③が 11、④が 12。

① ハン場

A ハン対運動をする

B ハン分に切る

C 炊ハン器を買う

D 量ハン店に行く

② ショウ応

A ショウ明器具

B ショウ待状

C ショウ像画

D 起ショウ転結

③ 薫トウ

A 舞トウ会

B 浸トウ庄

C 大トウ領

D トウ芸家

④ 形而上学

A じ

B に

C い

D ぎ

問二 傍線1「この男の言うことは或る意味ではもつともなことだと感じた」とあるが、筆者がこのように感じた理由として最も適切なものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 13。

A 三島由紀夫の貴族趣味は表面的で、本当はその裏返しの野性を愛していたから。

B 三島由紀夫は世界の凡庸さを描くこともあるが、それは素材に過ぎないから。

C 三島由紀夫が描く貴族的な世界は一部のみで、実は左翼陣営に属する作家だから。

D 三島由紀夫にとって主要な関心の対象は、凡庸な者たちとその世界であったから。

問三 空欄

ア

エ

14。に当てはまる語の組み合わせとして、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマ

- |   |      |   |      |   |      |   |      |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| A | ア 類型 | イ | イ 個人 | ウ | ウ 物語 | エ | エ 差異 |
| B | ア 類型 | イ | イ 日常 | ウ | ウ 小説 | エ | エ 差異 |
| C | ア 物語 | イ | イ 日常 | ウ | ウ 物語 | エ | エ 純粋 |
| D | ア 物語 | イ | イ 個人 | ウ | ウ 小説 | エ | エ 純粋 |

問四

傍線2「戦後すぐに書かれた作品群」とあるが、次の中から同じ時期に書かれた作品を一つ選び、その符号をマークせよ。

解答番号は

15。

A 蟹工船

B 斜陽

C ふらんす物語

D 檸檬

問五

空欄

a

16。に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

- A 喜劇的に或いは情熱的に或いは物語的に
- B 悲劇的に或いは道徳的に或いは哲学的に
- C 文学的に或いは貴族的に或いは情緒的に
- D 歴史的に或いは実録的に或いは啓蒙的に

問六 空欄 b に当てはまる言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

17。

- A 物語的ならざる徹底的な平凡さの延々とした退屈の魔
- B 物語的であって日常的な退屈さを偽装する反俗性の畏
- C 小説的ならざる徹底的に日常とは異なつた劇的な物語
- D 小説的であって日常的な平凡からは区別された反俗性

問七 傍線3「三島氏の戦後の試み」とあるが、筆者は戦後の三島由紀夫の仕事をどのようなものであつたと評価しているか、最も適切なものを次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 18。

- A 凡庸な事件の連鎖による幻惑が物語を生成する様子をとらえたもの
- B 平凡な事件を意図的に偽装すると劇的な物語になることを示したもの
- C 凡庸な世界がいかにして劇化されるのかその仕組みを注視したもの
- D 平凡な世界から劇的な物語を生みだした近代文学を暗に批判するもの



問八 次のの中から本文の内容と合致するものを一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は 19。

A 三島由紀夫が貴族的世界の対極にある下層階級の者たちを共感的に描いたのは、凡庸こそが劇化にふさわしいからである。

B 近代文学は凡庸さの幻惑から逃れられないが、三島由紀夫は敗戦の経験を機にそれを注視することを試みるようになった。

C 卑俗さと野性を描くことは貴族趣味の裏返しとも言えるが、三島由紀夫は凡庸な事件に潜むその物語化作用を見ていた。

D 三島由紀夫が近代文学の中でもとりわけ美的なのは、徹底的な平凡さの経験で物語的機能の発見が促されたからである。

(三) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

昔、玄敏僧都といふ人有りけり。山階寺のやむごとなき智者なりけれど、世を厭ふ心深くして、更に寺の交はりを好まず。三輪川のほとりに、わづかなる草の庵を結びてなむ思ひつつ住みける。

桓武の帝の御時、この事聞こしめして、あながちに召し出だしければ、のがるべき方なくて、なまじひに参りにけり。  
されども、なほ本意ならず思ひけるにや、奈良の帝の御世に、大僧都になし給ひけるを辞し申すとて詠める。

<sup>1</sup> 三輪川のきよき流れにすぎてし衣の袖をまたはげがさじ  
とてなむ、奉りける。

かかる程に、弟子にも使はるる人にも知られずして、いづちともなく失せにけり。さるべき所に尋ね求むれど、さらになし。言ふかひ無くて日ごろ経にけれど、かのあたりの人はいはず、すべて、世の嘆きにてぞありける。

その後、年ごろ経て、弟子なりける人、事の便りありて、越の方へ行きける道に、或る所に大きな河あり。渡し舟待ち得て乗りたるほどに、この渡し守を見れば、<sup>\*</sup>頭はおつつかみといふほどに生ひたる法師の、きたなげなる麻の衣着たるにてなむ有りけり。「あやしの様や」と見るほどに、さすがに見なれたる様に覚ゆるを、「誰かはこれに似たる」と思ひめぐらすほどに、失せて年ごろになりぬる我が師の僧都に見なしつ。「ひが目か」と見れど、露たがふべくもあらず。いとかなしうて、涙のこぼるるをおさへつつ、さりげ無くもてなしける。

<sup>2</sup> 彼も見知れる気色ながら、ことさら目見あはず。走り寄りて、「いかでか、かくては」とも言はまほしけれど、いたく人しげければ「なかなかあやしかりぬべし。上りさまに、夜など、居給へらむ所に尋ね行きて、<sup>3</sup> のどかに聞こえむ」とて、<sup>4</sup> 過ぎにけり。

かくて、帰るさに、その渡りに至りて見れば、あらぬ渡し守なり。まづ、ア、こまかに尋ねれば、「さる法師侍り。年ごろこの渡し守にて侍りしを、さやうの下臈<sup>げらふ</sup>ともなく、常に心をすまして、念仏をのみ申して、かずかずに舟賃取る事もなくして、ただ今うち食ふ物なんどの外は、物をむさぶる心も無く侍りしかば、<sup>5</sup> 此の里の人もいみじういとほしうし侍りしほどに、

いかなる事か有りけむ、過ぎぬるころ、かき消つ様に失せて、行方も知らず」と語るに、くやしく、わりなく覚えて、その月日を数ふれば、我が見あひたる時にぞありける。身6の有り様を知られぬとて、又去りにけるなるべし。

この事は、物語にも書きて侍るとなむ。人のほのぼの語りしばかりを書きけるなり。  
又、古今の歌に、

山田守る僧都の身こそあはれなれ イ はてぬればとふ人もなし

これも、かの玄敏の歌と申し侍り。雲風の如くさすらへ行きければ、田など守る時も有りけるにこそ。

近きころ、三井寺の道顕僧都と聞こゆる人侍りき。かの物語を見て、涙を流しつつ、「渡し守こそ、げに、罪なくて世を渡る道なりけれ」とて、湖の方に舟を一つまうけられたりけるとかや。その事、あらましばかりにて、空しく石山の河岸に朽ちにけれども、乞ひ願ふころざしは、なほありがたくぞ侍りし。  
(鴨長明『発心集』による)

注

\* なまじひに……いたしかたなく

\* 奈良の帝……平城天皇(在位八〇六—八〇九)

\* 頭はおつつかみといふほどに生ひたる……つかめるほどにまで髪が伸びた

\* むさぶる……「むさぶる」に同じ

問一 傍線1の和歌に込められた思いとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は

20。

- A 清流で洗い清めた法衣を、寺の人たちの手で汚されたくない
- B 遁世して澄んだ心を、俗世間にまみれることで濁らせたくない
- C 庶民の中で清貧に生きてきた身を、高位に着くことで崩されたくない
- D 一人の帝に仕えてきた忠誠心を、別の帝に仕えることで失いたくない

問二 傍線2「彼も見知れる気色ながら、ことさら目見あはず」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号

をマークせよ。解答番号は

21。

- A 弟子も、師の僧都に気づいていながら、わざと目を合わせなかった
- B 弟子も、師の僧都の様子が見慣れたものだったので、特に目を引かなかった
- C 師の僧都も、弟子に気づいていながら、わざと目を合わせなかった
- D 師の僧都も、弟子の様子が見慣れたものだったので、特に目を引かなかった

問三 傍線3「給へらむ」についての文法的な説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答

番号は

22。

- A 尊敬の補助動詞「給ふ」命令形＋完了の助動詞「り」未然形＋推量の助動詞「む」連体形
- B 尊敬の補助動詞「給ふ」已然形＋尊敬の助動詞「る」未然形＋推量の助動詞「む」連体形
- C 尊敬の補助動詞「給ふ」已然形＋推量の助動詞「らむ」連体形
- D 謙讓の補助動詞「給ふ」連用形＋推量の助動詞「らむ」連体形

問四 傍線4「過ぎにけり」という行動を取った理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **23**。

- A 落ちぶれた相手は話すのを嫌がると思いやったから
- B 再会できた感激の余り心が落ち着かなかつたから
- C 久しぶりに会って話すのが気恥ずかしく感じたから
- D 人が多くここではゆっくり話せないと思ったから

問五 空欄 **ア** に入る表現として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **24**。

- A 頭かしら甚だ痛み、面おもても赤みて
- B 魂迷ひ、身の毛もいよ立ちて
- C 腹立ち、心も騒ぎて
- D 目くれ、胸もふたがりて

問六 傍線5「いとほしうし侍りし」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **25**。

- A 憐憫を感じていました
- B 敬意を表していました
- C 頼りに思っていました
- D 親近感を抱いていました

問七 傍線6「身の有り様を知られぬとて」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **26**。

- A 自分が何をしているか突き止められたからには、ここに居続けるわけにはいかないと、思って
- B 仏に帰依する自分の心が確かめられないからには、更なる修行を積まなければならないと思って
- C 自分の将来がどうなるか見通せないからには、ここで安穩と過ごすわけにはいかないと、思って
- D 弟子がすっかりやっていることが分かったからには、師としてもう心配することはないと、思って

問八 空欄 **イ** に入る語として最も適切なものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **27**。

- A あき
- B いね
- C つゆ
- D ふね

問九 本文の内容と合致するものを、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **28**。

- A 玄敏僧都は、帝の命令に応じることは全くなかった。
- B 玄敏僧都は、渡し守をしながらも、仏に心を寄せていた。
- C 玄敏僧都は、渡し守を辞めた後、田守になった。
- D 玄敏僧都の影響で、道頭僧都は、渡し守になった。

問十 本文に描かれる玄敏僧都が生きた奈良時代から平安時代初期に成立した作品を、次の中から一つ選び、その符号をマークせよ。解答番号は **29**。

- A 法華義疏
- B 日本霊異記
- C 往生要集
- D 正法眼蔵